

はじめに

「花が咲くまで」

三月下旬、大学時代の先輩と久しぶりに再会し、食事をした。私よりも十以上も年上で、私は先輩と思っているのだが、向こうはいつも年の離れた友人と言ってくれる。出会いはたまたま受講していた言語学の授業の一つ。私は大学三年生で、その友人は英語教育の出版の仕事をしている社会人であった。席が近かったこともあり、よく話すようになり、私が教員になってからも、原稿執筆のお仕事を頂いたり、たまにお会いして食事をするなどして、お付き合いは続いて今に至る。もうあれから三十年が経つ。

さて、その先輩との出会いのきっかけとなった言語学の授業は、学生が皆、疲れのたまってきた金曜日の、しかも最終時限の授業とあって、そもそも受講生は多くなかったのだが、何をしているのかいまいちわかりづらい授業展開に、一人、そしてまた一人、と受講生は去っていき、最終的にその先輩と私を含め、七人くらいが一年間残って受講した。授業の内容は年度の最初に配られたたった一枚の A4 の紙に書かれた短文の日本語と英語を、どんな文脈で使うものなのかの解釈をひたすら意見を出す、というものであった。ただ毎週、一人が解釈を言ったら、また別の人が解釈を言う。そしてまた別の人が解釈を言う。この繰り返しなのであった。先生も自分なりの解釈を、時には一人芝居のように演じながら披露してくださったりしたもの、特にこれが正解、と決めつけずに、学生の解釈一つ一つに「なるほど、確かにそういう解釈もありますね。」と言われるだけであった。だが授業の回数を重ねるにつれ、そしてさまざまな人が、そこに書かれた短文の文脈を思いつくにつれ、放り出されたように無味乾燥な形で転がっていた短文一つ一つに、息吹が吹き込まれていく不思議を感じたのは今でもよく覚えている。年間を通じてほんの数枚にしかならなかったプリントに書かれた短文たちは、一年経ったときには、たった七名の受講生の「手あか」だらけになった。

久しぶりの再会だったこともあり、食事しながら、出会いのきっかけとなったその授業の教えが一体何だったのかをあらためて二人で振り返った。そして結局、文の意味とはそんなに簡単に決めつけられるものではない、という視点を教え込まれたのだ、ということが二人の意見の一致したことだった。文の意味とはそんなに簡単に決めつけられるものではない——口に出せば5秒とかかからないこのことを、一年かけて知らず知らずのうちに、意識の深いところにまで染み込まされたことを卒業して何年も経った今思うとき、授業の教えにいかに辛抱強さが必要なのかを実感する。人工能によって簡単に結論らしき情報を手に入れることが容易になった現代だが、人が生きていく上で支えとするような視座や心構えとなる教えは、たとえそれが口に出してしまえば数秒のことであっても、本人のものとなるには信じられないほどの時間がかかるものなのだろうと思う。いつか咲いてくれればよい——私にとってその先生の偉大さの一つはまさに、きっとこう信じて、確たる反応を目の前から得られずとも一切のブレをも生じさせずに教え続けたことにある。先輩と二人で駅までの帰り道に見た美しい夜桜が、妙に印象に残る夜であった。

はじめに

「立つ鳥跡を濁さず」

私が就職した頃の職場は、今よりもっと仕事の時間外の交流が年代をまたいで盛んだった。食事に行くだけでなく、幹事役を買って出て、皆をうまくまとめてくれる同僚の設定で、10人近くで芝居を見に行ったりもした。私は元々、芝居を見に行く経験がそれほどなく、背景知識が足りなかったこともあってか、中には見ても意味がよくわからないものもあったが、ふだんは授業という空間において、自分の内から外に向けてエネルギーを放出する自分たちが数時間、他人が発するエネルギーを浴びながら、目の前に展開する「出来事」に思考をめぐらせることで、あるいは明日からの英気を養っていたのかもしれない。芝居のいくつかに出ていた俳優の中に、1990年代後半にKDD(現・KDDI)のCMで歌う姿が印象的だった斎藤晴彦という俳優がいた。実際、芝居の中でも歌うシーンがあって、その都度、CMのインパクトのある歌声が思い出された。時の流れとともに、人が気がつかない程度の速度でゆるやかにもたらされる変化によって、職場からはいつしか、そうした芝居に行く文化は薄れていった。

ちょうど10年くらい前のことだ。世田谷美術館で開かれていた写真展を見に行ったときに、たまたま掲示してあったポスターでその日、同美術館のホールで、その写真展に関連して斎藤氏による歌のコンサート(「東京昭和十一年をうたう」)が開かれることを知った。時計を見ると、少し待てばちょうど開演の時間。ふだんはあまり予定していなかったことをしない自分ではあるが、以前職場の仲間と見に行ったお芝居で聞いた歌声が懐かしくなって、当日券を購入し、聴くことにした。ピアノの演奏に合わせて斎藤氏とまだ若い何人かの俳優が、代わる代わる昔の歌を歌うという、実に簡素な、それでいてどこか芯のあるコンサートだった。細身の身体からは想像できない声量の生の歌声にしばし身をゆだねたひとときは、思いがけず素敵な時間となった。そのたった3週間後のこと、テレビのニュースで、斎藤氏が路上で倒れ、急逝したことを知った。

後日、追悼の意味を込めて企画され放映されたあるテレビ番組で、氏がよく通っていたという喫茶店の店主が氏の印象を尋ねられ、好きなカレーを食べ終わった後に口を拭いた紙ナプキンを、必ず持ち帰っていたことだ、と述懐していたのが心に残った。人間の認識とは実に不思議なもので、科学的にはそこまで違いを生じさせてはいないかもしれないのに、一度でも人が手をつけたもの、口をつけたものには意識の上で大きな違いを認めることが多い。自分が口を拭いた後の紙ナプキンの印象は、自分から見たのでは絶対に感じることはできない否定的な要素を他人は見えてとるものであろう。それを行きつけの店の店主に片づけさせず、サッとポケットにしまって店を後にする行為に、氏が生きてきた中で大事にしていたのであろう美意識を感じて、一瞬でそれに「一目惚れ」した。私はあの番組を見て以来、お店で口を拭いたものは、持ち帰るようになった。

はじめに

「隔たりの深化」

「邪魔くさいなあ」。つい先日、家に帰る途中の駅で乗り込んできた男性が、先頭車両の一番前の扉脇にいた息子と私に聞こえるようなささやき声で言った。今まで車椅子に乗った息子と二人で出かけたときに、嫌なことをされたり言われたりしたことはあったが、これは抜きん出していた。私にとっては世界新記録的なこの否定的な言葉は、そのあまりのひどさゆえに、私の中に何の感情の波をもたらさなかった。その男性はその後、少し混んだ車両の中で奥まで進み、反対側の扉付近で向こうを向いた形で立って、高級そうなブックカバーに守られた文庫本を読んでいた。年齢は私と同じか少し上くらい。50代くらいだったろうか。髪はきれいに整い、両耳には今どきにしては珍しく黒の有線のイヤホンがささっていた。服の上下は明るめの紺色のちょっとカジュアルに見えるスーツで、肩にかけた鞆は栗色の革製で、スーツの色と妙に合って素敵だった。靴は真新しいと思われるスニーカー。全体として見て、ファッション雑誌から切り抜いてきたかと思われるほどセンスが良く見えた。私はその後ろ姿を少し視線を落として眺めながら、センスの良さげなその外見に包まれた中身に潜むその人の考え方と自分の考え方の隔たりの大きさを思った。

私たちはよく、ある社会特有の考え方、といった言い方をする。確かに、大きくとらえたときに、その社会の構成員全員が前提として共有している考え方の傾向があることは理解する。しかし現実的な話、日々の生活においてぶつかり合うのは、そうした前提の上に立って個々人が毎日を生きるなかで培った個人的な価値観である。その人が日々、何を食べ、何を読み、何を観て、どんな人と付き合っているのか。それによって私たちの考え方は、無数の方向性のパターンを持って芽を伸ばす。そうして分化して生じる隔たりのはなはだしさは、件の考え方で生きている男性とそれを想像だにしなかった私ほどになる。メディアの多様化により、人々が吸い込む情報も多様化した。それゆえに、自分が何を自分の栄養とするのかもセンスがより問われる時代になった。自己の価値観を少しずつ固めつつある貴重な十代を過ごしている皆には、そのことを考えて、毎日の時間を大事に過ごしてもらいたいと強く思う。

...

勉強に集中しやすい季節になった。今学期後半と来学期は、木の葉のような、英文を構成する細かいパーツの性格を眺めた前半とは打ってかわって、それらが連なって文の中で欠かせない骨となる、言わば木の幹のようなところを学ぶ。これによって読める文の型が一気に増える。しっかりついてきてほしい。

2025年10月22日 中2英語1(2025) 担当:青柳良太